

コメント集



1市町村1事例報告書寄稿

沖縄大学 教授 島村 聡

「協調から協創へ」

最近、「離島の役場で欠員」という報道があり、沖縄県の新たな課題が提起されている。離島や僻地を抱え、福祉専門職が偏在している中で、障害のある人たちの地域移行・定着を支えていくためには、かなりの知恵と工夫がより必要となっている。

特に、地域移行のためには、各支援機関の協調的な調整により一貫した支援方針を立て、利用者に合わせた新たなネットワークを創り、必要かつ柔軟な資源を開発していくことが求められる。

その中核となるのが(自立支援)協議会である。協議会には、①情報機能(情報の共有と発信)、②調整機能(分野を越えたネットワーク)、③開発機能(資源の開発・改善)、④教育機能(構成員の資質向上・研修の場)、⑤権利擁護機能(権利侵害のチェック)、⑥評価機能(相談支援体制の評価)の6つの機能がある。

改めて事例をみると、精神医療機関と地域の相談支援専門員、グループホームによる調整(事例1)、相談部会と教員の情報共有と調整(事例2)、新たなグループホームの開発(事例3)、生活困窮者自立支援機関やサブリースを使う調整(事例4)、市地域移行コーディネーターの開発(事例5)、福祉と病院の情報共有と相互教育(事例6)、当事者活動の継続と研修の場づくり(事例7)と、しっかりと機能を発揮していることがわかる。

まさに地域の力を結集した「協創」的協議会の姿を示した見事な事例集である。





1市町村1事例報告書寄稿

独立行政法人国立病院機構琉球病院
琉球病院 院長 福治康秀

この度は、1市町村1事例報告に係るハンドブックの発刊、誠に喜ばしいことです。発刊に関わった多くの関係者の皆さん、本当にお疲れ様です。

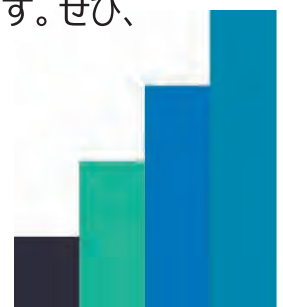
当事者の方々が地域で生き生きと生活するためのエッセンスが、この中には詰まっています。地域移行・地域定着を進めていく中では、多くの困難があります。それを、どのように超えていくかが要となります。その時に、多くの関係者がしっかりと連携・協議し、いろんな知恵を寄せ合って超えていくことが重要です。そのプロセスがこのハンドブックには満載されています。

長年、県の地域移行・地域定着事業に関わらせていただきました。その中で、関係者の皆さんの熱意とチームワークをいつも感じていました。貴重な取り組みが多くありました。それを成果として残すことは重要で、さらに多くの方々とシェアできないかと感じていたところ、このようなかたちで発刊するアイデアが皆さんから出てきました。そして、このようにかたちとなりました。

これを、多くの方々が活かして、さらに多くの方々の地域移行・地域定着が進むことを願っています。

私が勤めている病院でも地域移行・地域定着を進めておりますが、当初は地域移行に対するモチベーションの少ない患者さんでも、実際に地域で暮らし始めると、「よかった」と言ってくれる方がほとんどです。当事者も、関係者もあきらめずに取り組むことが大事と感じます。

このハンドブックでは、具体的で応用がしやすい内容が満載です。ぜひ、参考にして応用してください。





1市町村1事例報告書寄稿

一般社団法人 沖縄県精神保健福祉士協会
会長 西銘隆

「地域移行・地域定着支援ハンドブック」発行にあたり

「素晴らしいハンドブックだ」と私は素直に思いました。

このハンドブックは沖縄県自立支援協議会の住まい・地域支援部会(地域移行・地域定着ワーキング)で協議されたことを受け、当協会が受託した「地域における医療と福祉の連携 体制整備事業(コーディネーター事業)」で配置されているコーディネーターが中心となって「ハンドブック作成委員会」が結成され、その後の地道な作業を経て、この度完成に至っております。

紹介された事例をみると、的確なポイントが示されており、実践で活用出来るヒントが数多くあります。「長期入院から退院に至った事例」「学校の教員と協働した事例」「地域において資源開発した事例」など福祉と医療現場、行政や教育等、多機関多職種が共に手を携え連携した好事例ばかりで、それぞれの立場からも支援の貴重なヒントになると確信しております。またソーシャルアクションの重要性も示唆しています。

ご本人、ご家族の希望や不安、葛藤、に丁寧に寄り添いながら支援を担ってきた皆様に敬意を表したいと思います。

精神保健福祉士には、長期入院している精神障害者の地域移行支援、さらに地域で安心して暮らし生活の質を高める支援、そのために必要な地域づくり等を担う役割(使命)があります。コーディネーター事業が、このような形でハンドブック作成に寄与できたことはこの上ない喜びです。

結びに、この「ハンドブック」が障害福祉分野の発展に寄与することを願い、当協会としてもご本人、ご家族、悩んでいる支援者の皆様へ届けられるよう尽力して行く所存です。





1市町村1事例報告書寄稿

公立大学法人名桜大学大学院
看護学研究科博士後期課程
特任教授 鈴木 啓子

「こんなハンドブックが欲しかった！」

こころの不調や精神疾患は、私たち誰もが生活の中で、経験しうるものです。

しかし、こころの病で本人が苦しんでいても、周囲からはわかりにくかったり、助けを求めることが難しかったりします。特に、長期入院している精神障がい者の方々をはじめ、障がいを持ちながら地域で暮らす方々の支援については、精神科医療機関や地域の援助事業者による頑張りだけでは限界があります。地域によっては利用できる資源も予算も限られていることがあります。

そんな中で、どのように、子どもから大人、高齢者まで、精神障がいの程度にかかわらず誰もが安心して自分らしく暮らせる地域づくりができるのでしょうか。これは支援者だけではなく地域で暮らす私たち皆の問題です。「難しいさ～」「だからよ～」では終わりたくない。

このハンドブックには、7つの好事例と県内すべての居住支援情報(住まい探し、保証人代行、暮らし支援など)、相談支援窓口情報が掲載されています。「こんなことが、今、利用できるのか！」「こんな取り組みをやっているんだ！」「もしかしたら、うちでもやれるかも！」といった、気づき、ひらめき、可能性を見せてくれます。

令和2年度からの県内各市町村での地域移行・地域定着支援に関する好事例及び課題の検討の分析から抽出されたエッセンスが本ハンドブックには詰まっています。一歩進む、勇気と希望をもたらしてくれると思います。

当事者の皆さん、ご家族、支援者の皆さん、専門家の皆さん、県民の皆さんに是非、ご一読頂けたらと思います。